
姫君と魔王

やすみこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫君と魔王

【Nコード】

N9126E

【作者名】

やすみこ

【あらすじ】

ラグシアはフリージア王国のお姫様。だけどもんだお転婆で、暇さえあれば剣を握る。その腕前や、並みの騎士ではその足元にも及ばない。ある日、いつもの魔物退治から帰ってきたラグシアは、「魔王」を「家来」として引き連れていた。大剣豪なお姫様と家来にされた魔王が贈る、ファンタジックstory。

プロローグ

いける。

一瞬の隙だった。強固な岩石の、僅かな亀裂のような。

それを見逃さず、過たず確実に、突く。それほど力を込めたわけではない。

ただただ、鋭く、正確に。

その岩石が硬ければ堅いほど、小さな亀裂から簡単に砕ける。全くその通りだった。

甲高い金属音とともに、大人の身の丈程の大剣が弾き飛ぶ。くるくる回転しながら、ちょうど真上に上った太陽の光にきらめきながら、綺麗な弧を描き空を飛び、音もなく地面に突き刺さった。

呆然と立ち尽くす男の咽元に、剣の切っ先を突きつける。

「私の、勝ちだね」

口角を吊り上げて、微笑んでみせる。剣はまだ、離さない。

男は眉間に溪谷のような深い皺を刻んで、舌打ちしながら両手を肩の高さにあげた。

「約束、ちゃんと守ってくれるよね」

更に笑みを深くする。同時に剣を僅かに突き動かす。

男は苦々しげに、鋭く私を睨んだ。そしてそのままゆっくり、まるで唇が重くてたまらないかのようにゆっくり、一言だけ言葉を放った。

「御意」

澄んだ綺麗な声だった。

第一章 - 1 -

いい天気だった。

雲一つ無い空はどこまでも蒼く蒼く澄み切って果てしなく広がって
いて。

その空の中央にぼっかりと浮かんだ太陽は、淡く優しい光を放って
いて。

時折吹く風は凜と冷たくはあるけれど、穏やかで柔らかくて。

小春日和。

本当に、気の早い小さな春がやって来たような。

普段は無機的で荒涼とした雰囲気の漂う鍛錬場も、暖かな陽気が満
ちているせいかどこかいつもより華やかで。整然と整列した騎士達
の表情も、春の日差しのように晴れやかで柔らかい。

騎士達の前方に立って、その一人一人の顔を見回して、自然に頬が
緩む。

国に忠誠を誓った騎士とはいえ、大事な国民の一員であることに変
わりは無い。

民が幸せを、暖かな希望を感じてくれるのなら、単純に嬉しい。
この国の冬は、長い。

真っ白な雪が深く積もり地面を覆い隠す。分厚い雲が空を覆い、太
陽の光を遮る。

寂しく静かな冬は、長く長くこの国に居座る。

だからこそ、今日のようにふっと訪れた、小さな春に皆が歓喜する。
小さな、気の早い春。しかし、確実に春が近づいている証拠。

生命の輝きに満ち満ちた春の、その兆しは誰の心にも喜びと希望を
与える。

それなのに・・・。

私はそつと隣を盗み見て、大きく溜息を吐いてみせた。右隣に立つ、
不機嫌を顔中に滲ませた男に聞こえるように、大きく長くゆっくり

と。息を全て吐ききらないうちに、憎憎しげな舌打ちが振ってくる。男はこの国では珍しい漆黒の瞳を、深い嫌悪と非難に歪めて私を見下ろしていた。

薄い唇が、静かに開く。

「お前さ、何がしたいわけ？こんなとこ連れて来て、わざとらしく溜息なんか吐きやがって」

飛び出してきたのは城下の悪ガキのような、貴族の令嬢が聞けば思わず顔をしかめるよな、汚らしい言葉の数々。騎士達が一樣に顔を強張らせたのが見えた。

まあ、そうだろうな。

仮にも私は一国の姫だ。あんな言葉遣いをして、許される相手ではない。

しかし。誰もその口調を咎める声を上げることとはしなかった。

それもまた、そうだろう。

再び隣の男をそつと横目で見ながら、一人頷く。

だって。この男、一見普通の成人男性。しかしその実態や、知る人ぞ知る伝説の存在。

この国から出て馬を3日程北へ走らせた所に広がる「魔の森」。魔物達の総本山であるこの森の奥深く。聳え立つ古城に住まう、魔物の王。

魔王。

それがこの男の、肩書きだ。

魔王に向かつて、言葉遣いを注意できる人間はなかないだろう。まして「不機嫌な」魔王に向かつて。

そう、この魔王サマは、今すこぶる機嫌が悪かった。

直接的原因是寝不足。間接的原因是、私だった。

私が魔物退治を終えて城へ帰ってきたのは、一週間前。つまり、魔王が城に来て一週間がたった。

それなのに、魔王は未だに「人間の生活」に慣れる、否、合わせる意志がさらさらないらしい。

魔物達は、基本的に夜行性だ。

夜の闇を好み、日が暮れ闇が来ると活発に行動しだす。無論、魔王も魔物であるから、その例に漏れない。

人間は朝起きて夜寝るのだと、何度言い聞かせても彼は日が昇ると同時にベッドに潜り、夕日が差し込むと同時に起きる「魔物の生活」を崩そうとしなかった。

しかし。ここは人間の世界だ。あの森の、魔物の世界とは違う。

しかもここで彼は「王」ではなく、私に従う「家来」なのだ。それならば、人間に合わせた生活リズムに切り替え、ちゃんと身分相応の働きをしてもらわなければいけない。

ということ、私は魔王に、騎士団の稽古をつけさせることを決めた。

今まで騎士団の訓練は私の仕事だったが、私だって姫としての仕事の色々ある。中々稽古をつける暇がなかったから、魔王を連れて来たのは幸いだった。

彼の戦闘能力は、実際手合わせしたからよく分かる。かなり、強い。今まで手合わせした、誰よりも強かった。剣を交わして、一瞬でも「敗北」の文字が頭をよぎったのは彼が初めてだ。

だから、丁度良いと思った。

魔王が騎士団に稽古をつければ、魔王はここでの仕事ごとできて、つまりは私との「約束」をちゃんと守ることになって、しかも騎士団は強くなる。まさに一石二鳥。

思い立ったが吉日。早速私は、睡眠中の魔王を叩き起こして、騎士

たちの待つ鍛錬場へ引つ張ってきたのだ。結果、性懲りもなく朝寝した魔王はこの上なく機嫌を損ね、現在に至る。

腕を組んだまま、左側に重心をおいてだらしなく立つ魔王は、時折私に鋭い視線を向けて、わざとらしく大きく舌打ちをする。まるで拗ねた子どもだ。

けれど、ここで魔王のご機嫌取りなんかしているほど、私は暇ではない。

今日も魔物退治の以来が4、5件は入っている。そのほとんどが、急を要するものばかりだ。大事な時間を、こんなところで使ってしまうわけにはいかない。

隣から向けられる射るような視線を無視して、一步、前へ進み出る。「急に呼び出して、すみません。しかし、私が今日騎士団を招集したのは、他でもない」

魔王の腕を強く掴み、私の真横へ引つ張る。

「今日からあなた方を訓練する、この魔王を紹介するためです」

騎士達の表情に困惑と不安が一瞬、走る。みっともなく騒がなかったのは、流石王国騎士団と言ったところだ。

そう思った、刹那。視界の端で何かがきらめく。頭で理解するより先に、体が動いた。

右手が素早く剣を鞘から抜き、守の型に構える。

甲高い金属音。ずん、と腕にしびれるような重い衝撃が響く。

交わされた刃の向こうにあるのは、闇を固めたような漆黒。

「お前……。どういっつもりだ」

なおも剣に込める力を緩めず、むしろますます力を込めながら、魔王は低く問うた。

その声に、思わず笑ってしまう。

「そのままの、意味だよ。あなたに、うちの騎士団の訓練をしてもらう。魔王は人間の言語を理解できるって聞いてたけど……。デマ？」

魔王の白い肌が、さっと刷毛で刷いたように朱に染まる。そして一旦剣を引き、すぐに振り上げ、勢いよく振り下ろす。これは普通に受けたら、まずいな。

直感で判断して、後ろへ飛ぶ。ヒュッ、と風を斬る音がして、目と鼻の先を銀色の刃がかすっていく。

舌打ちが聞こえた。

私は思い切り地を蹴って間合いを詰め、剣の切っ先を、魔王の細い首に、突きつける。

「はい、終わり」

にっこり微笑む。

「・・・うぜえ」

顔をこれでもかというほどに歪めながら、魔王は剣を鞘にしまった。それでも、私はまだ剣を離さない。

「何？」

何じゃないでしょ。

心の中でため息を吐く。

全く。魔王を本当に、連れて来てよかったのか。分からなくなってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9126e/>

姫君と魔王

2010年10月8日22時24分発行